木にこだわる設計者 ⑤

坂田雅孝氏

ウッディファーム

主業務は設計士と業界の調整役

誇れる木造、木質内装化物件増やす

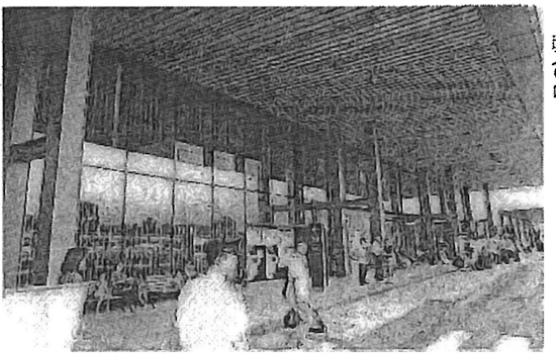
ウッディファーム（熊本市、坂田雅孝社長）は一級建築士事務所だが、主力業務は木造建築物の設計協力・支援、内・外装材を含めた木工事（施工図作成等）や木材の最終加工、納材等になる。設計士と木材業界の調整役を担うことで、木造建築物を多く実現していく役割を自任している。坂田社長が1994年に集成材メーカーから独立して同社を立ち上げたのも、木造建築物を普及するため提案営業を行っていきたいという気持ちからだった。

現在、同社は長年の経験、ノウハウが評価され、大から小まで様々な木造物件、木質内装化案件が持ち込まれる。むしろ昨今の課題は、「木材を扱うことに関する設計等の技術者、また職人が不足している」（坂田社長）ことにある。せっかく様々な場面で木材利用の機運が高まっているにもかかわらず、現場の対応が追い付かない状況だ。「木造建築専門の技術者、職人を養成する学校などが造れないものだろうか」（同社）と指摘する。

課題の一つとして、初期の設計段階から協力することで、設計士の実現したいデザインと木材業界の製造しやすい規格品をすり合わせていくことが重要だ。ある小学校では製材規格品を中心に設計が行われたが、ムク材にこだわるあまり太角でもJAS基準を満たす乾燥材が使われることになった。だがこれを実現するのは容易ではなく、ある部分では構造用集成材との使い分けも必要と話す。逆に、木材業界も住宅需要がメーンのなかで非住宅需要に対応するというスタンスでは、構造計算が必須となる非住宅重要にムク材が対応するのは難しく、一定の考え方の転換も促している。また今年度もそうだが予算の執行が遅れると、仕事はあっても納期の問題が気にかかるところだ。

木造、木質内装化に対する機運が各方面で高まっているのは間違いない。ただ地方自治体の予算が厳しくなっているのも現実だ。需要拡大にブレーキをかけてしまわないためにも、設計、資材はもとより、施工を含めたトータルコストを低減するためのシステムづくりにも、関係者と連携して取り組んでいきたい。

直近では構想から2年、同社が関わってから1年半ほどの時間をかけ、熊本の空の玄関口である「阿蘇くまもと空港」のリニューアル工事が完了した。県内木材業界が連携して県産杉、桧を約230立方㍍使用するなど、これだけ木材を多用した空港の建築物は他に例がなく、既に全国から注目を集めている。設計士等と木材業界の間にはすり合わせが必要な課題がまだ多くあるが、関係者が誇れるような木造、木質内装材物件が増えていけば、それもプラス方向に転じていくはずだ。



新装オープンした阿蘇くまもと空港の出入り口